

殖民・近代化  
**臺灣學研究**

**論文集**

國際學術研討會



K295.8-f3  
2922

# 臺灣學研究國際學術研討會： 殖民與近代化 論文集

Papers of the 2008 International Conference for  
Taiwan Studies: Colonization and Modernization



國立中央圖書館臺灣分館 編印

中華民國98年12月

## 國家圖書館出版品預行編目資料

臺灣學研究國際學術研討會：殖民與近代化論文集 =  
Papers of the 2008 International Conference for Taiwan  
Studies : colonization and modernization / 國立中央圖書  
館臺灣分館編；李玉瑾主編. -- 初版. -- 臺北縣中和  
市：臺灣分館, 民 98.12  
面；公分  
部分內容為日文  
ISBN 978-986-02-1156-6 (平裝)

1. 區域研究 2. 日據時期 3. 文集 4. 臺灣

733.07

98022399

## 臺灣學研究國際學術研討會： 殖民與近代化論文集

發行人：黃雯玲

出版者：國立中央圖書館臺灣分館  
臺北縣中和市中安街 85 號  
電話：02-29266888  
傳真：02-29261087  
網址：www.ntl.edu.tw

主編：李玉瑾

執行編輯：孟文莉

印製：致琦企業有限公司  
臺北縣永和市中和路 345 號 6 樓之 2  
電話：02-22324168  
傳真：02-22324165

出版日期：中華民國 98 年 12 月

版次：初版

定價：新臺幣 500 元

展售處：各大政府出版品展售中心

統一編號：1009803670

I S B N：978-986-02-1156-6 (平裝)



## 序

國立中央圖書館臺灣分館（以下簡稱本館）是臺灣歷史最悠久的圖書館，前身爲日治時期的「臺灣總督府圖書館」，迄今（98）年已屆 95 年。本館因典藏許多日治時期珍貴的史料，廣被國內外研究者稱爲臺灣學文獻資料的重鎮。96 年 3 月本館奉教育部核定成立「臺灣學研究中心」，以加速推廣臺灣學研究，以及整合國內臺灣研究文獻資源、建立臺灣學數位圖書館、加強與各學術單位合作與支援臺灣史課程教學爲目標。

爲了推廣館藏臺灣文獻特色，並加強與國內外學術研究單位的合作，本館近二年除發行《臺灣學通訊》月刊及《臺灣學研究》半年刊外，持續辦理「臺灣學系列講座」及「館藏臺灣學研究書展」，並出版講座及書展專輯。96 年辦理「臺灣學研究書展：海洋・殖民・近代化」，獲得讀者熱烈迴響；97 年起爰規劃一系列主題性「館藏臺灣學研究書展」；98 年並辦理巡迴書展，以期讓全國各地的讀者更加認識本館館藏。

本次「臺灣學研究國際研討會：殖民與近代化」係與國立臺灣師範大學臺灣史研究所共同合作辦理，會議以日治時期爲主軸，以呼應本館臺灣總督府圖書館的歷史背景及日治時期館藏文獻特色。會議於 97 年 11 月 7 日至 8 日舉辦，會中邀請了 6 位日、韓學者，以及 11 位國內相關研究領域的專家，總共發表了 1 篇專題演講及 17 篇論文，內容涵蓋了「教育」、「農業」、「經濟史」、「社會史」、「高等教育」、「殖民地支配」及「殖民與脫殖民」等 7 大主題，總計有三百餘位研究者與會。經過兩天的研討，專家學者們對此議題交換了許多寶貴意見，讓與會者收穫良多。

爲呈現此次研討會的豐碩成果，本館特將本研討會論文結集成冊，內容共錄國內外論文 14 篇，其中日本 5 篇、韓國 1 篇及臺灣 8 篇，每一篇論文皆邀請 2 位學者專家審查，相當具有學術性。本館希望藉由此論文集的出版，讓日治時期有關臺灣政治、社會、經濟、教育的發展有更進一步的闡釋，並期能促成臺灣研究與國際接軌，累積在地研究與國際研究對話的能量。



本論文集的出版要感謝春山明哲、檜山幸夫、栗原純、弘谷多喜夫、白柳弘幸、宋承錫、洪郁如、張靜宜、吳明勇、歐素瑛、洪紹洋、吳政憲、陳佳宏、蔡龍保等學者專家的撰稿，並特別感謝各審查委員的協助，始得以順利完成。惟編務繁冗，若有疏漏之處，尚祈各界不吝賜教指正。

國立中央圖書館臺灣分館

館長 **黃雯玲** 謹識

中華民國 98 年 12 月



# 序

本論文集爲「殖民與近代化：臺灣學研究國際學術研討會」之成果。爲了促進日治時期臺灣史研究之風氣，加強國內外臺灣研究之交流，使臺灣研究與國際區域研究接軌，俾提升臺灣史研究之水準，國立中央圖書館臺灣分館與國立臺灣師範大學臺灣史研究所乃於民國 97 年 11 月 7、8 日假臺灣分館國際會議廳，合辦此次的國際學術研討會。研討會除了專題演講外，分別邀請臺灣、日本、韓國等三國學者撰寫論文 17 篇提會宣讀，各篇論文皆有評論人。兩日會議期間，參加者十分踴躍，共有三百餘名，會中討論相當熱烈，激盪出許多精彩的對話，頗能收交流切磋之效果。

爲方便有興趣的研究者參考，並推廣會議之成果，會後決議出版論文集，於是，函請各作者參考評論人及與會者之建議，詳作增補修訂。每篇修訂稿，本會送請兩位學者審查，作者依審查意見再作補強，通過後，始彙集成爲本論文集。要之，本論文集之出版可說完全依學術論集出版之規定辦理。

本論文集之論文主題具多樣性，涵蓋殖民地支配、教育、農林業、經濟史、社會史等課題，題目幾乎都屬具創新意義之個案研究，作者無不仔細耙梳、利用一手史料，進行深入且綿密之論析，內容不僅讓人耳目一新，且頗具創見和參考價值，可說頗能反映近年來臺灣史研究之取向和特色。未來若能持續此一創新課題、小題大作、講究實証翔實的研究風氣，逐步建構完整的日治時期臺灣歷史圖像，咸信將可適切究明殖民與近代化之關係。願與研究同道共勉之，是爲序。

國立臺灣師範大學歷史學系

教授 吳文星

民國 98 年 12 月



# 序

眾所周知，國立中央圖書館臺灣分館因承繼典藏日治時期臺灣總督府圖書館大量的珍貴圖書、期刊、報紙、地圖等，早已是聞名國內外的台灣研究（特別是日本殖民統治時期研究）資料重鎮。長期以來，利用台灣分館館藏資料進行台灣研究的成果，包括學術著作、碩博士論文，以及坊間相關出版品、新聞報導、雜誌文章等等，多不勝數。臺灣分館的館藏提供了台灣研究極其豐富的養分，無論從事台灣歷史、文學、文化、社會、經濟、產業、法治、博物，甚至美術、設計、音樂……等各領域的研究，都不能不利用這一個寶庫。

2007 年 3 月，臺灣分館奉准成立了「臺灣學研究中心」，更加積極進行台灣研究相關資料的徵集，以及館藏資料利用的推廣服務。由於這個因緣，加上地利之便（與臺灣分館僅捷運二站之隔），台灣師範大學台灣史研究所於該年開始將三門課程部分時段移至台灣分館進行教學，使「假如教室像圖書館」的理念付諸實現，同時，也因而開啓了台師大台史所與台灣分館一連串相互協助合作計畫的契機。《臺灣學通訊》、《臺灣學研究》期刊的編輯，「臺灣學系列講座」的推動，都可以看到二個單位之間合作的痕跡；而 2007 年底的「臺灣學研究書展：海洋・殖民・近代化」，與 2008 年起一系列的「館藏臺灣學研究書展」（至 2009 年底止共 2 年 11 檔展覽），更是圖書館與學術研究機構相輔相成的實績展現。

2008 年台灣分館擬舉辦台灣學相關的國際學術研討會，在台師大台史所與吳文星、黃紹恆、鍾淑敏等教授的協助籌畫，以及獲得台、日、韓等國學者首肯發表論文下，於該年 11 月 7、8 兩日，舉行「臺灣學研究國際學術研討會：殖民與近代化」，共發表了 17 篇論文以及專題演講 1 場。由於這是臺灣分館成立「臺灣學研究中心」以來，所舉辦的第一場國際學術研討會，因此會議主題設定在與臺灣分館館藏最契合的日本統治時期的議題上，並承接 2007 年底的「臺灣學研究書展：海洋・殖民・近代化」課題，而以「殖民與近代化」為討論主軸，針對日治時期所推展或遺留下的「殖民」、「近代化」問題，藉台、日、韓學者的論文，作進一步的詮釋。



本論文集是該研討會各場次之論文，經過評論人、審查人審查之後的成果。除了台灣學者們的鼎力支持外，遠自日本與韓國而來的春山明哲、檜山幸夫、栗原純、弘谷多喜夫、白柳弘幸、宋承錫教授們的演講與賜稿，亦是研討會圓滿呈現的重要元素。

在感謝各方盛情的同時，更期望中央圖書館臺灣分館能持續舉辦台灣學相關的國際學術研討會等等活動，深化臺灣學研究中心的實質內涵。是為序。

國立台灣師範大學台灣史研究所

所長 **蔡錦堂**

民國 98 年 12 月





## 目 次

|              |     |
|--------------|-----|
| 黃雯玲館長序 ..... | I   |
| 吳文星教授序 ..... | III |
| 蔡錦堂所長序 ..... | IV  |

### 國外論文

植民地統治と文明・学問・信仰の関係について・

序論：帝国日本による台湾統治と4人の日本人を例として .....

春山明哲 .....1

帝国日本統治下台湾における台湾人戦死者の：靖国

神社合祀問題について ..... 檜山幸夫 .....15

統治初期における台湾総督府の旧慣調査と土地政策：

南部地方を中心として ..... 栗原純 .....41

戦後（1945－92年）における台湾の経済発展と教育：

世界史における近代植民地支配の遺産と関わって ..... 弘谷多喜夫 ...109

台湾『公学校修身教科書』に登場する人物：人物

を通して何を学ばせようとしたのか ..... 白柳弘幸 ...129

日據末期殖民地内的二言状況：以殖民地朝鮮和台灣

的小説爲分析中心 ..... 宋承錫 ...145



## 國內論文

- 學歷・女性・殖民地：從台北女子高等學院論日治  
時期女子高等教育問題 .....洪郁如 ...157
- 台灣總督府農業試驗所之試驗事業：以麻系作物為例 .....張靜宜 ...185
- 從植物園到愛林日：近代臺灣植樹制度與愛林思想  
之建立 .....吳明勇 ...215
- 從鬼稻到蓬萊米：磯永吉與臺灣稻作學的發展 .....歐素瑛 ...239
- 日治時期臺灣機械業的建立與發展：以臺灣鐵工所  
為例 .....洪紹洋 ...271
- 東京市「三電競爭」之始末：兼論官民營之利與弊  
(1911-1920) .....吳政憲 ...297
- 殖民、再殖民到解殖民？：林獻堂晚年的政治意向 .....陳佳宏 ...355
- 舊事物・新管理：日治初期臺北地區人力車的發展  
(1895-1904) .....蔡龍保 ...391



# 植民地統治と文明・学問・信仰 の関係について・序論： 帝国日本による台湾統治と 4人の日本人を例として

春山明哲\*

## 要旨

「植民化と近代化」は世界的に研究され論じられているテーマである。本稿では日本の台湾統治に関わった4人の日本人を取り上げ、植民地統治と、近代化の構成要素である文明、学問、信仰との関係の一端を考察した。

後藤新平(1857-1929)は1898年から1906年まで台湾総督府民政長官として、台湾の「植民化と近代化」を強力に推進した人物である。「生物学の原則による台湾経営」を標榜した後藤の統治思想の核心には、日本の文明開化と医師としての経験に基づく後藤独自の文明観が存在した。

京都帝大教授の法学者である岡松参太郎(1871-1921)は、台湾旧慣調査とそれに基づく立法事業を指導した。台湾旧慣調査は植民地統治を目的にしたものであったが、同時に台湾社会の人文社会科学的な総合的な調査研究という面を持っていた。

台湾山地で原住民とともに生活したクリスチャンの井上伊之助(1882-1966)は、医療活動を通じて基督教の「山地伝道」に献身した。井上の活動は無教会主義クリスチャンの内村鑑三とも信仰上の深い結びつきがあった。

『帝国主義下の台湾』の著者で東京帝大教授の矢内原忠雄(1893-1961)は、台湾議会設置請願運動や台湾文化協会活動を推進した蔡培火などの「新しい台湾青年」と、基督教の信仰を通じた友情を深めた。

後藤、岡松、井上、矢内原の4人に共通するのは、文明、学問、信仰という「普遍的なものへの志向」であり、同時にそれらは「未完の事業」であるという特徴を持っていた。

## キーワード

植民地統治、近代化、文明、学問、信仰、後藤新平、岡松参太郎、井上伊之助、矢内原忠雄

\* 早稲田大学台湾研究所客員上級研究員

## はじめに

皆さんおはようございます。本日、このような国際学術シンポジウムを開催され、多くの研究者に報告と討論の機会を提供して下さった、国立中央図書館台湾分館の黄雯玲館長、及び職員の皆様に、厚くお礼申し上げたいと思います。

また、国立図書館がこのような「台湾学」という専門的な研究領域のシンポジウムを開催されることは、図書館が従来の資料に関するサービスに加えて、調査研究の場としての機能を果たすことであります。このことは、台湾分館が図書館の新しい役割を開拓することを意味しており、かつて日本の国立国会図書館に勤めていた「図書館人」のひとり<sup>1</sup>として、興味深い、また意義の大きいことだと感じております。

今回のシンポジウムにあたり、最初の報告者、野球で言えば「トップバッター」を務めさせていただくことは、大変光栄に思います。しかし、「植民及び近代化」という大きなテーマについて、しかもこの領域で学識と研究実績の豊富な先生方を前に、お話しすることは、私にとってはとても荷が重いことでもあります。

幸いなことに、蔡錦堂先生<sup>2</sup>から「テーマは自由に設定してよろしい」と伺いましたので、それに私の後ろには「四番バッター」がたくさん控えておられますので、シンポの総合テーマにちなんで、私がこれまでの研究の中で考えてきたことの一端をお話したいと思います。時間も限られておりますので、本日はほんの「序論」になるかと思えます。

さて、「植民化と近代化」は世界的に研究され、論じられている大きなテーマです<sup>3</sup>。この問題を検討するためには、いろいろな側面からの議論が可能であり、また、多様な視角からのアプローチが可能であり、また、必要でしょう。

私は、自分の研究テーマとして、長い間植民地の「統治」という側面について

<sup>1</sup> 1974年4月国立国会図書館に入館、収集部主任司書、専門資料部科学技術資料課長、国会分館長、調査及び立法考査局次長、同・専門調査員などを歴任、2007年3月に退職。

なお、国立中央図書館職員の潘淑慧さんは国立国会図書館で研修生として調査研究を行い、その成果を『日本公共図書館の経営と管理』としてまとめられた（望春風文化事業股份有限公司出版、中華民國97年）。同書に国立国会図書館の歴史、機能、組織、経営等についての詳しい紹介がある。

<sup>2</sup> 国立台湾師範大学台湾史研究所長・教授。

<sup>3</sup> たとえば日本帝国の植民地については、日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』（アテネ社、2008年）が研究史のレビューと方法論的検討を行い、台湾、朝鮮等の個別の地域についても研究の現状・課題を論じている。また、台湾の植民化・近代化については、張隆志著、胎中千鶴訳「植民地近代の分析と後藤新平論」（『環』29号、2007年春）がある。





研究してきました<sup>4</sup>。日本と台湾という関係から言えば、近代日本から台湾を見る視角です。最近の数年は、「近代化」については「文明・学問・信仰」という三つのキーワードで考えてきました。この文明・学問・信仰は、「近代化」の「構成要素」でもあると思います。今日は、帝国日本の台湾統治に関わった、後藤新平、岡松参太郎、井上伊之助、矢内原忠雄、という4人の日本人を例として、研究の過程で考えたことを少しお話したいと思います。

## 一、後藤新平をめぐる

後藤新平(1857-1929)は、周知のように、日本による台湾統治の比較的初期、1898年(明治31)から1906年(明治39)まで、台湾総督府民政長官(当初は民政局長)を務めた人物です<sup>5</sup>。足掛け9年に及ぶ児玉源太郎・台湾総督と後藤民政長官の時期が、台湾の「植民化と近代化」にとって比類なく重要な時期であることは、誰も否定できないことであると思います。

しかし、後藤新平は、語るに易しく、研究するのには難しい人物です。ことに後藤の台湾統治をどのように歴史的に検証・評価するか、という問題は、今なお、大きな課題であると思います。

かつて、1970年代から80年代にかけて、日本には「台湾近現代史研究会」という共同研究グループがありました<sup>6</sup>。先年亡くなられた戴國輝博士を中心に、若林正文先生(東京大学教授)や私、そして本日ご出席の檜山幸夫先生(中京大学教授)、栗原純先生(東京女子大学教授)、弘谷多喜夫先生(浜松大学教授)、陳梅卿先生(国立成功大学教授)も、かつてこの研究会のメンバーでした。この研究会は、一時「後藤新平研究会」という名称でした。というのは共同研究のテーマとして、後藤新平の研究をめざしていたからです。しかし、この後藤研究は途中で挫折しました。私としては、いつか、後藤新平の台湾統治について研究しようと考えていました。

昨年春、私は国立国会図書館を定年退職し、早稲田大学台湾研究所の客員研究員として、研究する時間と場所を得ましたので、「後藤新平研究」を再開するこ

<sup>4</sup> 春山明哲『近代日本と台湾—霧社事件・植民地統治政策の研究—』(藤原書店、2008年)。

<sup>5</sup> 後藤新平の伝記及び研究史については、前掲の『近代日本と台湾』所収の「後藤新平の台湾統治論・植民政策論—「政治思想」の視点からの序論—」及び「「後藤新平伝」編纂事業と「後藤新平アーカイブ」の成立」を参照されたい。

<sup>6</sup> 春山明哲「台湾近現代史研究会の思い出」(『近代日本と台湾』所収)。なお、最初の講演記録は中国語に翻訳され、若林正文・呉密察主編『跨界的台湾史研究』(台湾・播種者文化有限公司、2004年)に収録されている。

とにしました。

どのように研究するか、その方法について随分考えましたが、いわば「ゼロからの出発」を試みることにしました。後藤新平については「科学的政治家」であるとか、「辣腕を振るった帝国主義者」であるとか、「生物学的植民地統治」を実行したとか、さまざまなイメージ、「レッテル」がありますが、ひとまず、これらは全部「一旦脇へ置いて」、「後藤新平の実像」に接近しよう、と考えました。

私が第一段階として採用した方法はふたつです。

ひとつは、後藤の「著作」を読むことです。後藤自身が何を書き、どう語っているのか、それも植民政策や台湾統治についてだけでなく、なるべく多くのものに目を通すことです。

もうひとつは、あらゆる「後藤論」の基になっている、鶴見祐輔の手になる伝記『後藤新平』について、その成立を調べることです。なお、鶴見祐輔は後藤新平の娘婿です。

後藤の「著作」については、東京の日比谷公園にある東京市政調査会の市政専門図書館に通って調べました。この市政調査会とその建物とは、後藤新平が安田善次郎<sup>7</sup>の援助を得て創立したものです。この調査結果の一部は、『後藤新平大全』<sup>8</sup>という本に収録された「後藤新平の全著作・関連文献一覧」に付した「解題 メディアの政治家・後藤新平と『言葉の力』」に書きました。後藤の「著作」は広く取れば、260点ぐらいになるでしょう。いろいろと面白いものがあるのですが、紹介する時間がありません。

もうひとつは、鶴見祐輔『後藤新平』がどのようにして書かれたか、という問題です。鶴見は序文で、この本の執筆態度として「新史伝」と「政治史」の方法を採用した、と書いています<sup>9</sup>。「新史伝」とは、鶴見によれば主人公の人格の発展を描く「小説」であり、「科学と文学（芸術）」の統一が目標である、と述べています。つまり、この伝記は「文学」の要素を多量に持っているわけで、だから「主人公」である後藤が生き生きと書いてあるわけで、そのつもりで読んで欲しい、と鶴見は言っているのです。と同時に、『後藤新平』は単なる一人の著作者鶴見祐輔の作品ではありません。この伝記は「後藤新平伯伝記編纂会」の事業に

<sup>7</sup> 安田善次郎(1838-1921)は明治・大正期の実業家。安田銀行を中心に一代で安田財閥を作り上げた。後藤新平が東京市長の時に会い意気投合、東京市政への資金援助を約した直後に右翼に殺された。その後安田家の資金援助で日比谷公会堂が建設され、東京市政調査会も設立された。

<sup>8</sup> 御厨貴編『後藤新平大全 正伝 後藤新平・別巻』藤原書店、2007年。

<sup>9</sup> 史伝作家としての鶴見祐輔については、春山「研究ノート『後藤新平の謎』第1回 孫文と後藤新平、『後藤新平の会 会報』第1号、2006年4月、参照。



よる、いわば「ビッグ・プロジェクト」の結果として刊行されたものです。このやや詳しい経過については、『後藤新平伝』編纂事業と<後藤新平アーカイブ>の成立<sup>10</sup>に書きましたので、機会があればご覧ください。

さて、これらの作業をもとにして書いたのが、「後藤新平の台湾統治論・植民政策論—「政治思想」の視点からの序論—」<sup>11</sup>です。この小論は、これまでの後藤新平に関する研究のレビュー、鶴見祐輔『後藤新平』の成立過程、後藤新平の「著作」（「言葉」の世界）の検討を踏まえて、後藤新平の台湾統治論をその「政治思想」の観点から、論じたものです。私はこの中で、構想段階、実践段階、総括段階の三つに分けて、後藤の台湾統治論を分析しました。

私は、かつて、後藤の統治思想は台湾において「文明としての近代」が希薄であった時期に有効であった、と論じました<sup>12</sup>。今ここで詳しく検討する時間はありませんが、ともかく後藤が台湾に持ち込もうとしたのは「文明のワンセット」と言ってもよいでしょう。

しかし、今、私が抱えている基本的な問いは、後藤はなぜ台湾に「文明」を持ち込むためにあれほどの努力を傾けたのか、という点です。後藤は、しばしば「文明的植民政策」という言い方をします<sup>13</sup>。この「文明」は単なる修辞でしょうか。

後藤新平にとって「文明」とはなにか、なぜ台湾に「文明」を持ち込もうとしたのでしょうか。この問題を検討するにあたっての、私の「作業仮説」のいくつかを掲げておきます。

一つは、後藤自身の医師、衛生行政、留学体験から形成された「文明観」です。後藤は明治日本の「文明開化」に少年時代を送った人ですから、当然これは「西欧文明」と言ってよいでしょう。そして、後藤の「西欧文明」理解の中心には「学知」<sup>14</sup>があった、と私は考えています。これは純粋な学問というよりも「社会的技術」の性格を色濃くもったものだと思います。それと同時に、後藤は「文明」を受け入れる「社会」の慣習、自治、伝統を重視しました。現代的に言えば、伝統的社会の「身体性」といっても良いかも知れません。このことを示す後藤の代表的な著作のひとつが『国家衛生原理』<sup>15</sup>という本です。

<sup>10</sup> 『環』29号、2007年4月。前掲、春山『近代日本と台湾』所収。

<sup>11</sup> 前掲、春山『近代日本と台湾』所収。

<sup>12</sup> 春山「明治憲法体制と台湾統治」、『近代日本と台湾』所収。

<sup>13</sup> 例えば、後藤新平「日本植民政策の史的経済的關係」（大正3年5月20日幸倶楽部に於ける講演）、『日本植民政策一斑』（拓殖新報社、1921年）所収。

<sup>14</sup> 春山「後藤新平の台湾経営と帝国日本の『学知』の系譜」、中央研究院台湾史研究所「日本帝国植民地の比較研究」国際シンポジウム（2008年10月30-31日）における報告を参照。

<sup>15</sup> 後藤新平『国家衛生原理』、1889年（明治22）。創造出版（1978年）及び大空社（1992年、滝沢利

二つ目は、劉銘伝の事業との関係です。後藤は劉銘伝に対して、妙な言い方も知れませんが、相当「対抗意識」を持っていたようです。後藤が開始しようとした土地調査事業について、当時の日本政府の中には、劉銘伝でさえ失敗したのだから止めたほうが良い、という声がありました。後藤はこれにたいそう反発しています<sup>16</sup>。それはともかく、後藤が行った事業を劉銘伝のそれと比較すると、その類似性は確実にあります<sup>17</sup>。後藤には、劉銘伝の改革の達成と失敗を徹底的に分析し、それを異なった方法で成功させよう、という意識があったのではないかと思います。そのひとつが、「台湾旧慣調査」であったと言えるかも知れません。

三つ目は、彼の「台湾認識」、「台湾経験」に関係します。後藤は後年、台湾での経験は、自分にとって人類観・社会観・施政観・経世観の形成に大きな影響を与えた、と回顧し、「台湾は三千年にわたる人類生活の歴史のパノラマ」のようだ、と言っております<sup>18</sup>。後藤は台湾の中に、伝統的な中国社会を見る一方で（例えば、「土匪」の抗日闘争を「水滸伝」に例えています<sup>19</sup>）、漢族や台湾原住民などから成る台湾社会の歴史的個性を見逃しませんでしたし、どこか楽しんでいるようでもあります。

もうひとつ、後藤の「文明」を論ずる際に落とせないものとして、新渡戸稲造の存在があります。台湾の糖業改良政策の立案から始まって、後藤と終生にわたる深い交友があった新渡戸については、また、別の機会に譲りたいと思います。

## 二、岡松参太郎をめぐる

岡松参太郎（1871-1921）は、1899年（明治32）、京都帝国大学法科大学の教授に就任した年に台湾総督府から招聘され、以後、臨時台湾旧慣調査会の調査を主導した人物です。また、終生、後藤新平の政策立案に関わるブレーン・スタッフでもありました。岡松参太郎については、かつて書いたもの<sup>20</sup>がありますので、

---

行編『近代日本養生論・衛生論集成 第9巻』所収）の複製版がある。

<sup>16</sup> 後藤新平『日本植民論』（公民同盟出版部、1915年）、30-32頁。

<sup>17</sup> 伊能嘉矩『台湾巡撫トシテノ劉銘伝』（新高堂、1905年）には、劉銘伝の構想・企画・事業が詳細に記述されており、おそらくこの情報内容は後藤新平など台湾総督府当局が参照・分析したものと思われる。

<sup>18</sup> 後藤新平『日本膨脹論』（大日本雄弁会、1924年）の「執筆の由来」、2頁。なお、春山「後藤新平の台湾統治論・植民政策論」参照。

<sup>19</sup> 例えば、後藤新平は貴族院における質疑の中で「之〔土匪〕ヲ一言ニシテ申シマスルト先ヅ水滸伝ノ活劇ト申シテ差支ナイヤウナルモノデアリマス」と説明している（台湾総督府編『台湾ニ施行スヘキ法令ニ関スル法律其ノ沿革並現行律令』、31頁。第13回貴族院議事速記録、明治31年12月10日）。

<sup>20</sup> 春山「台湾旧慣調査と立法構想—岡松参太郎による調査と立案を中心に—」、「法学博士・岡松参太



機会がありましたらご覧いただきたいと、思います。

後藤新平と岡松参太郎にはその台湾統治上の役割とは別に、ある共通点があります。それは二人とも膨大な文書資料を残したことです。

さきほど、後藤新平の伝記編纂会の事業がビッグ・プロジェクトだった、と申し上げましたが、この事業の大きな部分を占めたのが、ほかならぬ後藤新平家にあった資料の整理です。その内容から受ける印象は、後藤は「すべての資料を残す意志があった」ということです。そうでなければ、あのような膨大な資料が残るはずがありません。このことは、後藤を理解するひとつの重要なポイントだと思います。

岡松参太郎も同様です。以前、台湾総督府文書講習会での講演でお話したことがあります。岡松家に残された資料はこれまた膨大なもので、台湾関係だけで3600点に上り、しかもその内容は、台湾統治政策の核心に迫るものが多く含まれております。岡松が後藤と異なる点があります。それは、岡松自身が資料の分類整理を行っていることで、また、京都帝大図書館の洋書の目録作成にも関わっていることです。この点からすると、岡松は日本の近代文書学・図書館学史における初期の「アーキビスト」兼「ライブラリアン」だったとも言えましょう。

岡松文書については、早稲田大学図書館に寄贈されまして、多くの関係者のご努力により、ようやく文書目録が完成し、マイクロフィルム版が出版される運びとなりました<sup>21</sup>。宣伝する訳ではないのですが、岡松文書とその目録を国立中央図書館台湾分館の6階に「台湾学資料」として備えていただければ、台湾における研究者にとって有用なものだと思います。

後藤と岡松の共通点の二つ目は、「学問」との関係です。後藤新平は平素「学俗接近」<sup>22</sup>を唱えまして、実社会から遊離した、ひからびた学問のあり方を批判しています。しかし、旧慣調査を学術調査の手法で行うために、岡松をはじめとして京都帝大の学者を動員したこと、それに多大な経費と時間を投入したことなどを考えると、後藤が「学問」を重視したことは明白だと思います。

岡松はもともと学者ですから、学問をすることは当然ですが、彼が統治政策の立案という、いわば「政治的な目的」を超えて、「学問」としてなにを残したの

---

郎と台湾」。いずれも『近代日本と台湾』所収。

<sup>21</sup> 早稲田大学図書館・早稲田大学東アジア法研究所編『早稲田大学図書館所蔵 岡松参太郎文書目録』（雄松堂アーカイブズ、2008年）、『マイクロフィルム版 岡松参太郎文書』（雄松堂）。

<sup>22</sup> 後藤の「学俗接近」の思想及びその社会教育分野での実践、特に信州（長野県）における活動には興味深いものがある。中島純『後藤新平「学俗接近」論と通俗学会の研究—夏期大学運動の思想と実践—』（中島純、2004年）を参照。